
私と彼の恋物語

by とろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と彼の恋物語

【NZコード】

N6441X

【作者名】

b_yとろ

【あらすじ】

私、シャルル・ロードライトは恋をしました。

その相手は　　一日中眠つてゐる、怠惰で落ちこぼれな少年！？
晴れて恋人同士になつた私たち。

実は世界最強な彼と、私の恋の物語。

魔法もあるよ。アレなシーンは無いけどな！
良かつたら見てやってください。

プロローグ（前書き）

俺の言いたいことは一つ

『爆ぜろ、リア充！』

そんな小説です。

プロローグ

「『世界最強の存在』^{ファースト・オリジン}とは、我々、魔法を扱えるものにとつて、最高の名誉であり憧れの称号です。これは下からD、C、B、A、S、^{アイアン}S、^{シヴァイ}S、^{ドライ}Sとあるランクとは別であり、実力はドライでさえ遠く及ばないといわれています。現在、『世界最強の存在』^{ファースト・オリジン}は五人いますが、公式に確認されているのは、

『紅星を背負う物』^{クロス・プロメテウス}
イグニ・リヒヤルド

『凍てつく氷燐』^{ブレイジング・スケイル}

アリシア・ディ・アーシア

『慈悲深き光輪』^{シャナ・シャイニング}

レナ・フォンカルド

この三方だけでおり、レナ・フォンカルド様は我が『ステイティレ魔法学校』の生徒会長を務めています。

この三方以外の二方は二つ名だけ確認されており、

『心優しき狂戦士』^{カインジーク・バーサーカー}

『姿無き黒幕』^{インビシブル・フィクサー}

と、呼ばれています」

私はシャルル・ローライトは席を立つ、そうこいつとまた席に座つた。

「おお、さすが主席だ。細かいところまで良く憶えていたな。まあ、テストでこなこと出ないし、憶える必要なけどな」

チャールド先生の言葉を受けて、「ですよねー」と声が上がる。

ステイティレ魔法学校に入学してから3週間がたつた。

ステイティレ魔法学校

魔法界最高の魔道師養成機関。

3年間のカリキュラムで卒業生は最低でもランクBはいく超優秀校。

しかし、その実校風は自由。

可能性を開花してこそ、魔道は鍛えられる。

その教育方針で今までやつてこれたのだから尊敬できる。

しかし、さう、自由なのだ。

自由なのが流石にあればどうにかした方がいいと思つ。

私はちらりと教室の窓側の席で寝ている男子を見た。

ヴァン・ハイジール

髪と目が青く澄んでいる少年。

彼はとにかく寝ている。

起きているのはじまんの時だけなんじゃないか?しかししたたりはじめを食べている時も寝ているのかもしない。

そんな風に思ってしまうほどに彼の起きている姿を見たことが無い。

キーンコーン

「ん?おつと終了か。よじ起立、礼。解散していいぞ」

チャールド先生はそのまま教室から出て行った。

「シャルウ、遊びにいこー」

「ひやつ、もう、止めてってこいつてるでしょ。リンちゃん

活発そうな少女 リン・ルウが終了と同時に飛びかかってきたのだ。

「じみんに?・・・また見てたねえ、彼のこと

「ふえ!?な、何言つてゐの?」

「まあ、彼、顔はいいしねえ。きをつけなよ?意外と人気あるよ?」

彼

「だ、だから、違うつてば!」

「んん・・・」

彼がそう呻き、なんと起きたのだ。

もつ、教室には私たち3人しかいなかつた。

「え、えつと・・・」

「よつ、ちみ。お皿覚めいかが?」

「・・・?ああ、君は確か主席の・・・?」

「あ、は、はひ」

思わず囁んでしまつた。恥ずかしい。顔が赤くなっているのがわかる。

「大丈夫?」

そう、微笑んだ彼の姿は印象的で、また、ぼつと顔が熱くなつた。

「フツフ～ん・・・その子は、シャルル・ローデライト。私がリン・ルウ。よろしく」

「俺はヴァン・ハイジトール」

「ねえ、これから遊びに行かない?」

「リ、リンちゃん!-?」

「いや、悪いが用があるから。また誘ってくれるかい？」

「もひちひん。それじゅ」

「ありがとう。さよなら」

そうこうして私たちは分かれました。

あのあと、リンちゃんに迫られいびられ続けた。今は私の部屋でベッドに横になつている。

彼の顔を思い出すたび、顔が熱くなる。でも、嫌じやない。

分かつてる。

そう、これはきっと

恋、なのだ。

プロローグ（後書き）

何かつくチャッタ。
更新する予定は無いようなあるような・・・
たまに更新します。

口常（前書き）

肩の力を抜いて、主人公に呪いの言葉をかけてあげてください。
そんな感じの1話目です。

もう、3月だというのに2人しかいない教室の窓の外にはひらひらと雪が舞っている。

「俺は・・・化物だ」

そつ言い切り、田を伏せる。

怖いのだ。

自分が化物と知つて彼女はどう反應するだろつか？

恐怖するか？

侮蔑するか？

「・・・そんなことどうでもいいじゃないですか」

程なくして彼女が言つた言葉に俺は田を見開いた。
受け入れてくれるというのか？俺を？自分のよつな化物を。

彼女は優しく微笑み

そして彼女が続けて言つた言葉に、俺は体からあふれる思いを止められなかつた。

「 好きです。初めて会つたときからずっと、あなたのことが好きでした」

温かい物が俺の頬を伝つ。

「・・・俺も・・・ずっと君のことが

」

窓の外を降る雪だけが、重なる影を見守つていた。

「 ぐださい・・・あてぐださい・・・起きてぐださい

俺 ヴアン・エイジトールは体を揺さぶられる感覚とともに田
を覚ました。

「シャル・・・朝からなんて大胆だな・・・？」

「ふえ！？・・・な、なにいってるんですか！」

俺の彼女、シャルル・ローデライトだ。
付き合いだしたのは1ヶ月前だ。

俺が朝が弱いことを昨日伝えたから、今日が新学期といつともあ
つて、起こしてきてくれたのだろう。

本当に良くてきた子だ。からかうと面白いしな。

そんな事を考えながらベッドから起き上がる。

こひは、俺等が通つているスティティレ魔法学校の寮だ。

・・・あれ？女子つて入つていいんだっけ？一応男子寮だよな、こ
こ？

「許可ははとつてあります。ヴァン君を起^{ハシ}こしておくれって言つたら快く許可してくださいましたよ？」

疑問が顔に出ていたのだろう。シャルはそう答えた後、リビングの方に向かっていった。

「あの寮母め^{クンバはあ}・・・」

そう、毒づいた後、シャルに起こしてもらえたといふことで許すことにした。

ヴァン・ハイジトールは落ちこぼれだ。

魔法はろくに使えない。態度は悪い、といつか一日寝てる。そんな彼が曲がりなりにも進級して2年生になれたのは、校長が俺の素性を知つているからだろう。

『世界最強の存在』
ファースト・オリジン

その中の素性の公開はされていない2人の内の1人。

『心優しき狂戦士』
カインジーク・バーサーカー

それが俺だ。

シャルはそれを知っていて、それでも変わらず接してくれている。
どれだけ俺がシャルに救われているか、それを彼女は分かつていな
い。

しかし、と彼は思つ。

起じしてくれたときのシャルを思ひ出す。

金色の髪に、朝日を受けて輝く青色の瞳。

少し幼さが残る顔に、反面、出るといひは出で、引っ込むといひは
引っ込んでいる。

学年主席といひともあいまつて、学校のアイドルとよばれ、ファ
ンクラブさえ作られている。

そんな子が俺の彼女なのだ。

男として冥利に尽きる。

そんな事を考えながら制服に着替え、リビングに出る。

テーブルの上に並べられた朝食を見て、幸せを感じるヴァンであつ
た。

「同じクラスですねー。」

「おー、そうだな」

とても嬉しそうな顔をするシャル。

クラス分けの紙が張り出された掲示板の前だ。

一緒に登校してきたので、とても目立つた。

シャルは前述のとおり、学校のアイドル的存在。それに対し俺は、ある意味で有名な落ちこぼれ。

そんな2人が歩いていれば、目立つて仕方ないという物だ。

人が集まっているところは苦手だ、シャルもそれが分かっているのすぐにクラスの方へ向かう。

2-Cの教室に入ると、見知った顔がいくつかあった。

「あ、おはよー。シャルウ、久しぶりー元気にしてた?」

「わあ、リンちゃん!同じクラスだつたんだね!」

「ナシダそれー?ひどいなあ・・・あつ!」

何か思いついたように顔を輝かせると、途端にニヤニヤし始めた。

「そつかー、仕方ないよねえ、愛しの彼と同じクラスつてことで舞い上がっちゃってたんだもんねえ~」

「あ、あうう・・・」

「うわっ・・・まじで図星なの・・・まさか冬休み中にそんな関係になつたの?」

「ああ、まあな

俺が臆面も無くそう言い放つと、シャルの顔がぱっと音を立てて赤くなつた。

それを見たリンが真面目な顔をしてこちらを向く。

「シャルルを泣かせたら・・・許さないよ？」

「フツ・・・まかせる」

「ふふつ・・・いや、そつかー、あのシャルウがねえ・・・まあ、いいや。んじや、」これからよろしく

「ねつ、ひむへじく

「は、はい、よろしくね

まだ顔が赤いが、シャルも返事をする。

黒板に書いてあつた席順にしたがつて自分の席に着くと、隣はシャルだつた。

窓辺の席だし、隣はシャルだし、最近ついてるな。

そんな事を考えながら、俺は闇に意識を落とした。

男はやつきの会話を聞いていた。

「うそだろ・・・? そ、そつだ嘘に決まってる・・・ロードライトさんと、あんなクズが付き合ってるなんて・・・」

困惑していた男はやがて、冷静になり、それと同時にやつきのが嘘ではないと悟る。

「くそつーくそつー・・・あんなクズが、クズが・・・いや・・・そつか・・・あのクズがロードライツさんの弱みを握っていて・・・クズめ・・・ふふ、待っていてください・・・すぐに開放してあげるよ・・・ロードライツさん・・・」

口算（後書き）

最後のキモいやつが何故か活き活きかけた・・・。
なぜだ・・・?

変化の兆し（前書き）

一日に2本上げるとか・・・
つらい・・・
ヘルメットが無ければ死んでいたな。

そんな感じの2話目です。

変化の兆し

「見らわれてる気がする?」

1週間ほど経り、今、私は最近気になつてることを、ヴァン君に相談していました。

今日の授業も終わり教室には私たちしか居ず、視線も感じず、聞かれる心配も無くそれなら、と打ち明けてみたのです。

「はい・・・・」
「一週間ぐらいくらいずっと・・・

「・・・・・・」

「で、でも、家に帰ると視線も消えるので・・・心配・・・ないと・・」

最後のほうは、小さくなつてしましました。

大丈夫なわけがありません。ずっと、怖くて怖くて、唯一ヴァン君の側だけが安心できました。

それなのに、最近はヴァン君の側に居ても視線を感じるようになりました。

「・・・・シャル、いいんだ・・・」

「・・・・うう・・・・ヴァン君・・・・うう・・・

その言葉を聞いて私は思わず泣いてしまいました。

そして彼は優しく私を抱きしめてくれました。

「・・・聞いてくれ、シャル」

顔を上げると、彼の顔は憤怒に歪んでいました。

「ヴァン君・・・？」

「俺はそいつをどうにかしないと気が済まない・・・」

その言葉で理解します。

「でも、それだと・・・」

「力のことは大丈夫だ・・・抑えろとは言われていらないからな」

それに、と彼は続けました。

「自分の彼女のことを気づけなかつた俺にも腹が立つ」

「ち、ちがいます・・・ヴァン君のせいじゃ・・・」

「それでも、だ。俺の気が済まない・・・なあに、俺はシャルがい
れば何もいらない」

「ヴァン君・・・」

翌日

俺は早速行動を開始しようとしたのだが、その必要は無かった。

なぜなら、本人が会いに来たからである。

「僕が来たからにはもう大丈夫ですよ・・・ローデリライトさん」

学校にきたら「イツが待ち構えていたのだ。校門で。

顔はいいほうだろう。

一応、魔力も一般的に見れば多いほうだ。無駄がありすぎるが・
・。

「なんだてめえ・・・?」

「ハツ、このクズが！ローデリライトさんを齎してつき合わせるなんてとんだ下衆野郎だな」

「・・・は？」

俺とシャルの声が重なる。

「ね、ねえ、どういふ」と？

隣にいたリンが聞いてくるが、俺にも分からん・・・。

「とほけるな！おまえがロードライトさんを脅してつき合わせる事なんかお見通しだ！……ああ、ロードライトさん待つてください。今、このボク、テッラ・ダリウスがあなたを解放させてさしあげます」

名前を聞いた瞬間、リンが眼を見開く。

「う、うそ……」

「どうした？ 知り合いか……？」

「知らないの！？ ……いや、ヴァン君だしね……」

あきれた様に、ため息を吐かれた。

「ふんっー！」の僕を知らないなんて、さすがバカだな！

うぜぇなコイツ……

「ぼくこそ、5大公爵家の一つダリウス家の長男！ テッラ・ダリウスだ！」

どうだといわんばかりに人差し指を突きつけてきた。

うぜぇえええ……

「……で、そのバッテラ君が何のよう？」

「テッラだ！ やっぱり『ミだな貴様は、どうしてこんなヤツがこの学校にはいってこれたんだ？』

「・・・早く教室に行きたいんだが?」

「ふんっ！・・・ボクは貴様に『決闘』を申し込む！」

「決闘」

「そんな」ともしらんのかつー。さすが落ちこぼれのクズだな」

さつきから俺の後ろにいるシャルさんから途轍もない殺氣を感じる
んだが・・・?

「で、決闘つて？」

あきれた様にリンが丁寧に教えてくれた。

この学校の風変わりな校則の一つ。

生徒間での「いやいや」があった場合、この決闘で勝利したほうがいいと進めることができる。

されている。

・・・めんどくせえな、俺バス

「んなあ！・・・・・フン、やはり勝てなくて怖いか？」

「…・・・シャル?」

シャルが俺の制服の袖を引っ張っていた。

何かと思い尋ねてみる。

「あ、あの人です……あの人の視線が……」

そういうて俯いてしまった。

だが、理解する。

「コイツか……コイツが……シャルを……！」

「いや、気が変わった。受けてやるよ、決闘」

「ほう、まあいい……僕が勝つたらローライトさんを開放して
もらひうぞー！」

俺はもうそんな言葉を聞いていなかつた。

決闘は、翌日に行われた。

そして変な噂が流れているのか、休みの日といつこともあり、沢山の生徒が決闘を見に来ていた。

「ふん、逃げずにきたのは褒めてやる」

「御託はいい・・・いつとくが手加減できない・・・」

「あははははー落ちこぼれがボクに何をしようつていうんだい?」

そんな事を話していると、開始の時が迫ってきた。

『それでは両者前へ・・・それでは、開始!』

アナウンスがそつ告げて決闘が始まった。

「むりだわ・・・

私 現生徒会長、ティナ・フラットはそう呟いた。

決闘は生徒会が強制的に運営するようになつていてる。

生徒会長である彼女は強制的に見なくてはならない。

生徒情報は調べた。

あのダリウス家の長男

テッラ・ダリウス

高慢だが魔法技術に関しては確かな物だ。

そして、『落ちこぼれ』

ヴァン・ハイジール

彼に関しては何も分からなかつた。

だが、『落ちこぼれ』の名は聞いたことがある。

魔法がろくに使えない、校長の権限で特別に入学した生徒。

勝てるわけがない。

テッラは主席とまではいかないが優秀なのだ。落ちこぼれが勝てる
わけが無い。

そんな彼女の思いは、すぐに覆されることになる。

決闘が始まった瞬間

「すぐに終わらせてやる　　『ファイアーハー』」

テッラが魔法を唱え火を打ち出してくる。

ヴァンはよけない。

ボアア！

火はヴァンを直撃しはじける。

「はつ、やはりクズだつた・・・・・」

「おいおい、こんなんじや虫も殺せないぜ？」

火が晴れたそこには無傷のヴァンが立っていた。

「ふざけるな・・・・・！・・・！」のぐずがああ！
『バーニン
グ』！・！

「オオオオオオオオオオオオオオ！・！

特大の炎がヴァンを襲う。

しかし

「手加減はできないつて言つたよな

瞬間、ヴァンは消え、気づいたときにはテッラの後ろに立っていた。

「えつ・・・・・！？」

ヴァンはテッラの首筋を手刀で叩き氣絶させた。

『・・・・・！・！し、勝者、ヴァン・エイジトール！・！』

「やれやれ、やつぱり手加減しちまつた」

一瞬遅れて歓声が沸いた。

変化の兆し（後書き）

同時執筆つておひつう

感想待つてます！

急変（前書き）

これのほかに、もう一作、同時執筆しているのですが、設定が混ざつてしまつことがあります。

極力修正しますが、意味不明になつたら「めんない。

そんな感じの3話目です。

急変

運営側 つまり生徒会用の特別観賞席にいた私は、思わず椅子を倒すほどの勢いで立ち上がっていた。

今の試合を見て驚くな、という方が無理だろう。他の生徒会役員の皆も驚愕が目に見えて分かる。

いつも冷静沈着な副会長、ファーブ・ザナード君も驚きを隠せないでいる。

『……………し、勝者、ヴァン・エイジトール！…』

1分ほど之間を空けて、ようやくアナウンスがはいる。

それと同時に我にかえつた観客達の歓声が野戦場を支配する。

私もようやく我にかえり、ファーブ君に尋ねる。

「最後の一撃……見えた？」

「……………会長は？」

「無理よ……」

生徒会長といつのは、ステイティレ魔法学校といふ名門にはいつた者をまとめあげる、圧倒的なカリスマと強さが求められる。

つまりそれは学校最強といつひと。

あの『慈悲深き光輪』^{シャナ・シャイニング}が生徒会長だった去年は、トラブルなど一つも起きたかったというのに、新年度早々問題を起こされでは自信が無くなるというものだ。

話が逸れたが、その学校最強と優秀な生徒が集まる、生徒会の誰にも捕らえられない速さで動いた。

あの『落ちこぼれ』が、だ。

実力を隠していたのか、何らかのトラップか

いずれにしても、関係は無い。

本気でやれば負けるとは思わない。

使えるものは使う。

それがなんであらうと

観客の歓声が続いている中、倒れた　　て・・・てな・・・そう、
バツテラ君が担架で運ばれていくのを尻目に野戦場を後にする。

野戦場の入り口には、シャルが待つってくれた。

すぐに駆け寄り、抱きしめる。人がいないのを確認済みだ。

「は、はわっ・・・！『ヴァン君！あつ・・・』

顔を赤くしながら素直に受け入れてくれる。ああ、マジかわいい・・。

「もう、大丈夫だから」

「はい・・・」

「もう、怖くない・・・だろ？」

「はい・・・」

そうしてもう一度ぎゅっと、優しく力を入れる。

そして、シャルを開放する。

「ん、もう・・・場所を考えてください・・・」

「人なんかいないよ？」

「もうここ」とでは・・・はあ、もうここです

「・・・？ありがとう？」

「でもこれからどうするんですか？私としては、もうヴァン君が『落ちこぼれ』なんて呼ばれなくなると思うのでいいんですけど・・・」

「なら、いいよ シャルが側にいてくれるなら」

「はっ・・・・ず、ずするのです」

また顔を赤くしてうつむくシャル。かわいいなあ、もひ。

そんな会話が後3回、べらり続くのであった。

それは、決闘の次の日の昼時だった。

ピンポンパンポーン

『2 - い、ヴァン・エイジトール君。至急生徒会室に来てください。
繰り返します』

その放送を聴いたとき、何故か悪寒がした。

「うわー・・・まあ、ガンバ?」

リンが励ましてくれる。ああ、ありがと

「退学になつても、一応友達だよ?私たち

「なんで、退学つて決まつてんの!?」

前言撤回。じいづは死ねばいい。

「そ、そんな・・・・ヴァン君が・・・・

「シャル、そんな事にはならないからー!？」

「ううう・・・ヴァン君がいないと、私は・・・」

「ああ、シャルが涙目!・・・。そんなシャルもかわいいよっ!・・・つて違う!」

「そんなこと無こと思つけど、とりあえず行つてくるわ・・・」

「おう、ガンバ!・・・シャルウ、大丈夫だつて」

「ああ、心配だ・・・。」

とこうわけで、生徒会室の前に俺は来た。

すう、と深呼吸して心を落ち着け、腹をくくる。

コンコン

「失礼しまーす」

「いらっしゃい」

ドアを開けると、一人の女性がいた。

制服のリボンの色が緑、ということは3年生だ。

この学校は、1年が赤、2年が青、3年が緑、といつ風にそれぞれ決まっている。

「えーと……」

「まあ、とりあえす、そこに座つて」

と、指定されたソファに腰掛ける。

「とうあえず、生徒会長のティナ・フラシトよ。よろしく

「はあ、ヴァン・ハイジトールです」

「ええ、しかし、昨日の試合は驚いたわ。まさか、あのダリウス家の長男に勝つなんてね」

「あの、そんな話なら俺、帰りますけど……」

「ああ、『めんなさ』……なら、本題に入らうかしら」

自然と背筋が伸びた。まさか、本当に退学な分けないよな……？

「あなた、生徒会役員になりなさい」

「…………は？」

いま、こいつはなんと言った？ 生徒会役員だと？
そんなめんどくさそうな事やつてられつかよ。
ちやつちやと断つて

「『いつとく』あなたに拒否権は無いわ」

「んなつ・・・」「

頭イッてんのか?」「イツ・・・?

そんな事を思つたときだった。

バンッ!

勢によく生徒会室のドアが開いた。

「私は反対です。」

そんな事を言いながら出迎ってきたのは、がたいのいい赤い髪をした男
だった。どうやら一年生のようだ。

「じつこじつと? ダート戦?」

「ですからー!」んなやつを生徒会に入れるなんて私は反対です!」

いや、俺はこりゃねえし・・・。

そんな事を思つてゐる俺の前でドンドン話が進んでいく。

「それでは、あなたと彼、勝負しなさい!」

「・・・は?」

呆気にとられる俺。じつからダートと呼ばれたやつも呆気にとられ

た様子だ。

「彼が勝つたら、彼は生徒会へはいる。ダーク君あなたが勝つたら、どうともしなさい」

「……っ！ わかりました！」

「いや、俺に選択権は……？」

「ないわよ」

そもそも、当然といった風にいつてくる生徒会長。

そして側に来て耳打ちした。

(彼女、シャルル・ロードライターさんだったかしら……？)

俺は目を見開く。

「……てめえ」

「ふふ、異論は無いわね？ それでは一週間後、第一野戦場で」

そういうって、生徒会長は怪しく微笑んだ。

急変（後書き）

シャル、可愛いよ、シャルル。

ヴァンはシャルルのことをシャルと呼んでいます。

ヴァン視点でシャルと出でたら脱字ではありませんのでご注意を。

感想待っています。

狂剣の片鱗（前書き）

戦闘描写難しい・・・。

まあ、戦闘って言うほど戦闘ではないんですけどね。
序盤、主人公は敵を瞬殺が基本なのでサックサク進みます。

そんな感じの4話目です。

狂劍の片鱗

俺が生徒会室から帰るとシャルが待つてくれた。

「・・・大丈夫?、ヴァン君・・・?」

心配そうに俺の顔を覗き込んでくるシャル。

シャル・・・。

すまない。これだけはおまえには言えないんだ。
心配にさせたくない。

ただでさえ、ストーカーに遭っていたというのに。
これ以上おまえが心配することなんて無い。だから

「ああ・・・大丈夫だよ、シャル」

嘘をつく俺を許してくれ。シャル・・・。

生徒会室から戻ってきたヴァン君は静かに、けれどこれ異常ないくらいに怒っていました。

心配になつた私は思わず訊いてしまいました。

大丈夫?、と

彼は辛そうな顔で、大丈夫だ、と答えてくれました。

しかし、私の不安はぬぐえません。

答えた時の彼の顔が、憤怒に、苦しみに、悔いに、そしてほんの少しの悲しみに歪んでいたから。

私の不安は、ドンドン膨らんでいきました。

嫌な予感がする

その予感は、きっと正しかった。

それなのに私は、彼を止めてあげられなかつた。

一週間後

俺は生徒会長の指定した第一野戦場に来ていた。

「・・・来たわね」

フィールドに出ると生徒会長と戦闘相手のダートが立っていた。観戦席には生徒会役員と思しき奴等がいた。

「逃げずこきたことは褒めてやる・・・だが、俺はテッラのような

バカではないぞ?」

「…………」

俺は無言だった。

「……怖気づいたか。やはりコイツなんかに生徒会に入る資格はないですよ。会長?」

「…………」

俺はそれでも無言だった。

「フフフ、やあ、始めましょうか

「くつ・・・・・」

ダートは苦虫を噛んだような顔で初期位置へと歩いていく。

「……手加減はせんぞ」

「…………」

無言を貫き通す。

「それでは・・・開始!—!」

生徒会長がそいつた瞬間

勝負は決した。

「ヴァン君ー。起きてくださいーーい・・・」

いつものようにヴァン腰を起しつゝも、部屋はもぬけの殻だった。

今は朝の6時。休日なのに早すぎる、と彼は言うが、こつちとして
は一秒も早くヴァン君にあいたいのだ。

ヴァン君は私が起こして いるから起きて いるのであつて、自分からこの時間に起きるなんてありえない。

1週間前から感じていた嫌な予感が私を急かす。

急げ、急がないと取り返しのつかないことになる

私は急いで部屋を出ました。

「ヴァン君・・・」

ただの私の早とちりであつて欲しい。

そう、願わざにはいられませんでした。

何が起つたのか？

観戦しに来ていた役員の皆も野戦場に降りてきて警戒している。

一瞬だった。

私が開始を告げた瞬間、爆発でも起きたのかとつまびの音をたて野戦場の3分の一が吹き飛んだ。

ゅっくりと砂埃が晴れていく。

そこにいたのは、ぼろぼろになつて地面に突つ伏しているダート君と、それを見下すかのように立つていてるヴァン・ハイジトールだった。

ヴァン・ハイジトールがこちらを振り返り、私はぞつとした。

感情など無いものない、否、瞳の底で他の感情を燃やしながら静かに燃える憤怒がこちらを捉えていた。

ヴァン・ハイジトールが一步こちらに向かつて踏み出す。

われに返り、役員は私を守るように展開した。

「まあ、まちなれこ・・・ー？」れ以上近づかぬあの子が

「調子に乗るなよ、小娘……」

底冷えするほど冷たい声。

それが自分たちに向けられている。

恐怖が目の前にあるとき、人間がとる行動は決まっている。

恐怖の対象を「無くす」と

体は勝手に動いていた

役員の監督も、自分の持てる最高の技を放してはいた。

彼の右腕に銀の筆手が出現し、私たちの魔法を握りつぶした。

呆然とする私たちの前で、彼の筆手の、手の甲に一つ、腕に一つある光のない宝玉が順に紫色に光りだす。

意識が途切れる瞬間見たのは誰かの背中だった。

「調子に乗るなよ、小娘・・・」

俺がそういった後、生徒会の奴等は魔法を放ってきた。

怒りで自身を制御できていない俺は流れのままに、魔法『戦機召喚』^{セクトアップ}を発動した。

この『戦機召喚』こそが俺の唯一の魔法。

別次元に収納してある物を取り出す、という魔法だ。

俺は、一瞬で『三位の籠手』^{トリニティ・ギア}を装備して、迫り来る魔法を握り潰した。

そして拳に魔力をこめる。

『三位の籠手』^{トリニティ・ギア}

魔力を込めることによって、最大3個の高魔力体を出現させる。

この魔力体は、対象を殴ることによって、一瞬遅れて対象に発射され、自動的に追い討ちをかけることができる。

俺は右腕を何の躊躇もなく振り抜いた。

生徒会の奴等は拳の圧力と、魔力球によって見るも無残な姿に成り果てる。

ハズだった。

それは一人の少女の眼前で止まっていた。

一瞬遅れて剛風が巻き上がる。

少女は瞬き一つせず、それを見据えていた。

「…………どうにつけりだ？ シャル…………」

「…………！」

パチン、と

乾いた音が野戦場に響いた。

頬を引っ叩かれたと気付くのに少し時間がかった。

「田は、覚めましたか？」

「…………はあ」

ため息をつく俺に、シャルはやっと微笑んでくれた。

「また、やつちまつたのか…………」

そうつづぶやく俺にシャルはがばっと抱きつってきた。

「どうして、とは聞かません……ですが、心配したんですよ？」

「シャル…………」

「本当に、心配したんですね……」

「ああ・・・悪いな・・・」

シャルの髪を撫でてやる。

何分そうしただろ？

やつと落ち着いたシャルが生徒会の奴等を起こしていく。

「・・・うう

最初に目が覚めたのは生徒会長だった。

「よつ・・・

「・・・つーーー

起きた瞬間身構える。

「まあ、まて・・・全員起きてからだ

10分ほどで全員が起きた。

起きた瞬間俺を見て身構える、ということを全員がやった。なかなか面白いが、何か傷つくぞ・・・。

「さて・・・さつきは済まなかつたな

「あなた一体何者なの・・・？」

「それは気にするな」

「…………ええー…………」

「黙つとくがお前等がシャルにしようとしたことを俺は許したわけじゃあない」

その一言で固まる生徒会。

「それについては謝りせんもひつわ……」「あんなセー

「やけに素直だな……」

「もともと本気でやるつもりはなかつたのよ。ただ、あなたを鬪わせるにはいづるしかないと思つただけなの」

「なんで俺なんかを生徒会に入れようと思つたんだ?」

「強いからよ」

「強いからって入れるわけじゃないだろ」

「ホントの事よ……力が必要なのよ」

「なに……?」

「IJの学校に危機が迫つているわ」

狂劍の片鱗（後書き）

一週間交替で小説を書いていきたいと思します。
続きは来週からといつことになります。

感想・指摘あればバツシバシください。

幕開け（前書き）

何か凄い色々な人に見てもらえているようですね。
ありがとうございます。

皆様のご期待に応えられるように、頑張って生きたいと思います。
そんな感じの5話目です。

幕開け

「IJの学校に危機が迫っているわ」

「なに・・・？」

「実は、校外、それもすぐ近くで最近赤いバンダナをしたグループを見かけた、ということが増えてるの」

「赤いバンダナ・・・？」

「ええ・・・その情報が初めて入ったのが1ヶ月前。そして、その頃から学校に変な魔力が漂い始めたわ」

「それが学校の危機？」

「原因の一つではあるわ」

「他にもあるんですか？」

「小首を傾げるシャル。かわいいなあ。

「ちゃんと訊いてくださいね。ヴァン君？」

「お、おう・・・」

「いいかしら・・・？」

「あ、はー」

「確認された情報を元に検証し、校長とも話しあった結果、確認された奴等は『ブローカー』といつことが分かったわ」

「『ブローカー』……」

息を呑むシャル。しかし、俺にはせつぱりだ。

「『ブローカー』ってなんだ?」

「え・・・? あなた知らないの・・・?」

生徒会の役員共も「なに言つてんだこいつ」みたいな視線を浴びせてくる。

「ヴァン君、『ブローカー』ってこいつは最近この近辺の町を騒がせている盗賊だよ」

「へえ、そうなのか

「シャルルさん、こんなヤツが彼氏でいいのか?」

む、失礼だなコイツ。

「普段は疎いですけどこちつて言つとまことにせとでも頼りになりますよ」

「・・・幸せものねえ。あなた、彼女大切にしなさいよ?」

「いわれなくても分かってる」

何を当然のことと云つてゐるんだ、といわんばかりの視線を返してやる。

「・・・はあ。話が逸れたわね。その『ブローカー』がこの学園を標的にしていることが分かつたの」

「それが・・・？」

「ええ、この学校に迫つてゐる危機よ」

「・・・しかしながら、それなら警備を強化するとか、やつとうがあるだろ?」

「そんなものとつべつけられたわよ。けど『ブローカー』の一番やつかいなとこがその隠密行動にあるのよ」

「隠密行動ねえ・・・」

「ええ、組織の組員が推定50人。その約半分がBランクで、そいつ等が独自に開発した隠密の魔符が厄介なのよ」

「めんどくせえな・・・」

「そうなのよ。だから、とりあえず明日からあなたに夜の警備を頼むわ」

「・・・まで。何故俺が手伝うことになつてゐる?」

「そりやあ、試合に勝つたし、話をここまで聞いたんならねえ?」

「ああ、実力がどうとか言つていた自分が恥ずかしいな」

ダート君まで！？

「しかし、「いいですよ」つシャル！？」

「ヴァン君。よく考へてください」

「な、何だ・・・？」

「想像して貰ださい。私がその盗賊たちに捕らえられてしまつといろを」

「え・・・？」

「そして、その盗賊たちにムリヤリ・・・」

「よし、生徒会長。明日からの学校の平和は俺に任せろ！」

「「「「いい、顔してるな、おい！」」「」」

生徒会の奴等が驚愕していたが関係はない。

「許さねえ・・・毛も残さずぶつ飛ばしてやる・・・！」

額に青筋を立てながら、俺はこれ異常ないほどに怒っていた。

俺の、俺のシャルを・・・！許せん！――

「あ、でも一つ条件をのんでもういたいんです

「なにかしら……？」

「えっと、私も生徒会に入れてください」

「あら、どうちみちあなたも入れるつもりだったのよ？彼の監視と
して」

「あれ？ そうだったんですね？」

「ええ。 さて、一つ皿はオッケーよ。 二つ皿は？」

「ヴァン君の詮索をしない、といつひとですか？」

「や、それは……」

まあ、自分たちをいつも簡単にねじ伏せたやつのことを詮索するな
つていうのは酷だな。

俺が、『心優しき狂戦士^{カインジーク・バーサーカー}』つていうことをばらす訳にもいかんしな。
仕方ない。

「……わかつたわ。 その条件を飲みましょう」

「あつがとうござります。 それではこれからよろしくお願ひします

「ええ、じつじつや。 ……しかし、本当に戻れてくれた彼女ね」

「ここだわ！」

「ええ、本当に頂戴？」

「まつせ。・・・殺すぞ？」

「まよひと調子に乗つてゐるから、殺氣を向けてやつた。

「・・・や、やつぱり遠慮しないわ・・・」

「まよひ、真っ青になつてやがる。わああみる。

「と、とつあんず、今日まもつ遅このでいいほど解散しちゃう。

「あ、まつ4時? そつね、それでまじれで解散しまよひへ.

「えじや

「くこくーこ

「ああ、ハイジーラル君? 明日7時半に生徒会室に来るよ! ひ

俺は気楽に手を振りながら、寮に向かつて歩き出した。

「まあ、めざむへることになつてきましたなあ

やつこひとガアン君はベッドで腰掛けました。

「・・・・・」

「ん? ビリした、シャル」

「・・・です」

「え?」

「バカです・・・ヴァン君は」

「ああ、 そうだな」

「私があそこで止めなかつたら、殺していくたでしょ?」

「だらうな・・・」

「ばかですよ・・・」

「いめんな・・・」

やつこつて、アノ顔はさやっと私を抱きしめてくれました。

頭一つほど身長の差があるので私は彼の胸に顔をつすめる形になります。

「ばかです・・・」

彼の確かな温もりを感じながら、私は微笑みました。

「好きだよ・・・シャル

「私もです」

そして私たちの顔はふさがりました。

今までの、不安や、怒りを塗りつぶすほどに甘く優しいキスでした。

幕開け（後書き）

次からいよいよ動き出すゼッ。

しかし、主人公とヒロインの「いやいやつぱりが正直」に余る。
いけるのか・・・？

R-15も考えねばな・・・。

翻訳用語（翻訳用語）

もし、あなたがこのことか行動を取つまう。

私もやつまう。やってみせます。

そんな感じの話題です。

俺は生徒会長に言われたとおり、7時に生徒会室にきていた。

正確にはつれてこられた、だが。

「失礼しまーす」

ノックもせずにに入る俺にシャルは何か言いたげだったが、諦めたようだため息をついた。

「失礼します」

俺に続いてシャルも生徒会室に入った。もちろんノックをしていた。俺が入った後なのだから必要もないと思つたが。

「おはよう。ちゃんと来たわね」

「ええ、バツチリ起」しましたよ

「やつぱり、シャルルちゃんを入れたのは正解だつたわ

しみじみとこぼす生徒会長。

「ちやつちやと用件をいつてくれよ。いつまほ寝みーんだ

正直やつてられない。この時間は寝てるからな、いつもは。

「はあ、まあいいわ。

貴方達の事だけれども、実際には生徒会に所属はしないことになるわ。エイジトール君という強力な戦力が入ったけれど、できるだけ隠しておきたいのよ。エイジトール君は先のダリウス家との一戦で、一応実力は知れているけど、それでも急に生徒会に入るというのは不自然。こっちの思惑を悟られてしまう可能性が高いわ。だから、私がシャルルちゃんに私的で協力を頼んで、それにエイジトール君がついてきた、ということになつたわ。シャルルさんは学年主席だから、そんなに不自然ではないしね。と、いうことになつたのだけれども、いいかしら?」

「私はいいと思います」

「ありがと。エイジトール君は?」

「俺は、知らん」

「・・・は?」

「俺はバカだからな。シャルがいいと言つたんならいいだろ?」

「それでいいの?」

「ああ、俺はただ、シャルを守るために力を振るう。シャルはその矛先を導く。これで十分だ」

「ヴァン君・・・」

「シャル・・・」

うつとりと、その碧い瞳をつむませてこじらを見つめてくるシャル。

俺とシャルは生徒会長に見せつけるかのよう、甘い雰囲気をかもし出す。

まあ、シャルは完全に生徒会長のことは忘れて2人だけの世界に入っているから、見せつけているのは俺だ。

「何よ、その空氣は！？話は終わったから、ちやつちやと出て行きなさい！」

顔を真っ赤にして怒鳴つてくる生徒会長。

いい気味だ、と笑いながら急いで生徒会室を出た。

「・・・・・」

彼らが出て行つた後、入れ違いになるように役員の子達が来た。

その子達は、自分の顔を見て驚いていた。

それもそうだらう、今の私は、それこそ普段ほとんど見せない『思考』している姿をしているのだから。

私は、自分で言つのもなんだが天才だ。

力に関しては、先代が『世界最強の五人』^{ファースト・オリジン}だった事により上には上

がいる、ということを思い知らされたけれど、頭脳、知力や、頭の回転といつことは、少なくとも同世代の中では一番だと自負している。

だからこそ、自分はほとんど『思考』というもの、今回は『長考』とでも言つたほうがいいかもしないが、それをほとんどしない。

だから考え込む私、といつものを見て驚いていたのだ。つい。

いや、また。

(先代が『世界最強の五人』^{ファースト・オリジン}だつた?)

彼が、もしエイジトール君が『世界最強の五人』^{ファースト・オリジン}だつたら?

「・・・まさか」

そう思つが、ズンドン思考は進んでいく。

シャルルちゃんが詐索を禁止したこと。

彼が自分のことを道具のように扱つていてこと。

そしてなにより、彼の圧倒的なまでの力。

死を、殺しといつことに何の躊躇いもない、あの表情。

「・・・もし、本当にそつだつたとしたら

まずいことになる。

彼の、シャルルちゃんへの依存。

エイジトール君が、シャルルちゃんを失つたら

そう考へて、ぞっとした。

彼は間違いなく暴走するだらう。

彼といつ武器は、無差別に力を振るい、全てを破壊するだらう。

シャルルちゃんは、彼を導くだけではなく、鞄の役割もかねているのだ。

そんな彼女がいなくなってしまえば

「・・・会長?」

「・・・つー」

かけられた声で我に返る。

「どうしました・・・?顔色が悪いですよ?」

「なんでもないわ・・・あるはずがない

そうだ、あるはずがない。

彼が『世界最強の五人』^{ファースト・オリジン}など、自分の作り出した、ただの幻想。

だが、手は打つておかないといけないかも知れない。

彼らのために。

なにより、自分自身のために。

暗闇にはあどけのない声が響いていた。

「ねえねえ、カーヴァー」

「どうした? ラーヴァー」

声は一つ。

「そろそろ、だよ。カーヴァー」

「ああ、そろそろ、だな。ラーヴァー」

一つは少年のようだ。

「馬鹿な奴等に思い知らせよ!」

「「本物はどうちかをな」」

一つは暗く重い青年の声だった。

動き出す影。（後書き）

感想、叱咤激励、待っています。

狂獸（前書き）

はじめ。

いやー、この作品はどうに向かおうとしているんでしょうか？

そんな感じの7話目です。

狂獸

一匹の獣が吼える。

憤怒と憎悪、そして悲しみに縁取られた、悲劇の咆哮。

二〇一九

獸がまた叫え、
その腕を振る。

たたそれだけで地形が變れる

2時間前までは、切り立った山だったはずの山が、もはや原形をとどめていなかつた。

どうして

荒れ狂う獸が、吼えるたび、その腕を振るうたびに、周りは地獄と化していく。

私は、ただ呆然とそれを見ているだけ。

どうして……こんなことになつた……？

「シャルウウウウウウウウウウツツツ！！」

何も無くなつたそこには、悲痛な叫びだけがこだまする。

ただ、一匹の獣が

ただ、憐れな狂戦士が

泣き叫んでいた。

「『ブローカー』の居場所が分かつたわ」

そう、生徒会長に言われ、連れられてきた俺たち（もちろん俺とシヤルだ）の前にはこの学園の周囲が記されている地図が広げられていた。

「奴等の隠れ家は・・・」

会長が指差したそこは、危険区域に指定されている山だった。

「ここは確かに・・・5年前に特殊な毒性を持つガスが出てきた鉱山ですね」

「そりゃ。少し荒れているだろ？けど、隠れ家としては最適の場所よ

「んで？どうすんだ？」

「2日後、ここを叩くわ」

「なー？正氣ですか会長？」

「ええ。・・・大丈夫かしら？」

俺に確認を求めてきたつてことは・・・

「俺が全部やんのか？」

「流石にそんな事はしないけれど、あなたが主軸になるのは間違いないわ」

「ちひ、めんぢくせーな」

「で、どつなの？いけそつ？」

「ああ、かまわねえ」

「ちひ、ありがと」

「ハツ・・・いい迷惑だ」

「ヴァン君ー」

う・・・しまった。シャルはこいつの人に敏感だからな。

「いいのよ、シャルルちゃん。事実だもの」

「・・・作戦内容は?」

あわてて、会話をすり替へ。

「ええ、作戦内容は

「

ボーンボーン

生徒会室に備えられてある古時計が6時を知らせていた。

「あら? もう?」こんな時間ね。今日はこれまでこじまじょう

その言葉で解散となる。

「ああ・・・ハイジトール君?」

「んあ?なんだ?」

「少し話があるわ

「ん・・・分かった

「シャルルちゃんは悪いけど外で待つてくれね?」

「え・・・?はい・・・?

「悪いわね」

「いえ……」

「ううい、シャルは出て行つた。

「なんだ?」

「あなたたちのことは?」

「おれたちの……?」

「ええ。端的にいえば、今のあなたたちの状態は、はつきり言って危険よ」

「なに……?」

「あなたシャルちゃんがいなくなつたらどうする?」

「なにこいついやがる……!」

「あつくならないで。大事なことは?」

「……くつ」

「いなくなるなんて事考えたことも無いんじやない?」

「あたりめーだ」

「それが悪いとは言わないわ。むしろ信頼していくこと頼りだ」

「なんなんだよ・・・」

「だけれど、問題はそこなのよ」

「いいといったり、ダメといったり、なんなんだてめえ?」

「もうね。矛盾しているわね。でも、危険かもしれない」

「・・・・」

「無ことは悪いわ。でも、一応忠告しておくわ」

依存するの止めなさい。

「・・・」

「私の言いたいことはそれだけよ。もういいわ

生徒会室からの帰り道。

頭を埋め尽くしてくるのは、今朝のあの言葉。

『依存するの止めなさい』

「・・・んだよ」

「? なにかいいつた、ヴァン君?」

「いや・・・なんでもねえ」

「うだ、なんでもない。」

「・・・?」

「大丈夫だ。すこしつかれただけ」

「でも、会議中寝てたよね?」

「うぐ・・・つ」

「まつたぐ、もひ」

「ははは・・・」

いいじゃないか。

こんな平和をずっと望んでたんだ。

それに依存するなってのは無理だ。

それに、シャルは守つてみせる。

そのために力を付けたんだ。

守りたいものを守るために、俺は力を付けたんだ。

絶対に叶つてゐやう。

絶対に

間違っていたのはここからだつたのだろうか?

いや、もつとずつと前から

おれは、弱かつたんだ。

大切な物なんて守れない。

憐れな狂つた戦士。

俺はただ、叫んでいた。

唯一つ（前書き）

書けない・・・だと・・・？

ネタがでねえ。筆が進まん。
でも、後20話は頑張りたいと思つていますので、まだまだ続きます。

失踪はしません頑張ります。

そんな感じの8話目です。

唯一つ

『ブローカー』の倒滅作戦が決行されたのは会議から2日後だった。

メンバーは俺とシャル、会長に副会長。

作戦内容は、まず俺を正面からぶつけ、混乱に乗じて頭を打ち残つた奴等を一掃するという実にシンプルな物だった。

周囲には生徒会役員を展開し、万が一、逃げてきた奴等も逃さないようにしていく。

そして俺という規格外の存在がいるのだ、怪我人も出るはずは無かつた。

事実、途中まではうまくいっていた。

スムーズに、そして面白いほど作戦通りに『ブローカー』を一掃できた。

だが、捕らえた『ブローカー』の頭が発狂し、隠し持っていたナイフでもって縄を切り、逃げ出した。

それだけならまだ良かつた。

しかし、それに当たられた他の奴等までもが暴れだした。

そして、その1人がシャルを人質に取った。

あわてたが、その男はその場でシャルを襲おうとしていた。

すぐに俺はそいつを吹き飛ばした。

しかし、注意が逸れたその一瞬で、副会長が動いた。

助けるフリをして近づき、シャルを魔法で貫いたのだ。

世界が止まつた。

舞い散る血しぶきと、

崩れ落ちる彼女の姿。

とめどなく流れる鮮血が地面を染め上げ、

視界が真っ赤に染まる。

俺が覚えていたのはそこまでだった。

次に見たのは、荒れ果てた荒野と、そこに散らばる人間だった物。無残にも引きちぎられ、押しつぶされ、残っているのは体の一部か、肉だけだった。

「・・・・・・・・・・・・

声がない。

俺はどうした？

何が起きた？

拙い思考で考えていると、ふと足元に何かがぶつかった。

それは、魔法で貫かれた彼女の姿だった。

それを見た瞬間、全て思い出す。

だが、出てくるのは全て悲しみだけ。

「・・・・・・・・・・・・」

声が出た。

「・・・・・・・・・・・・」

それを声といつていいのかは分からなかつた。

「「「、「ああああああああああああああああああああ」

もつ何も残つてなどいない荒野で、悲しみだけが風に乗つて消えて
いった。

あのあと、私たちは学校に回収された。

どひやら副会長は本当に『ブローカー』の頭だつたようだ。

返り討ちにする算段だつたんだろうが、失敗した。

シャルルちゃんを殺れば、彼を無効化できると考へたのだろうが、
彼の暴走により全て殺され、アジトも無くなるといつ結果になつた。
。

あの場で生き残つたのは3人。

私と、彼と、シャルルちゃんだつた。

かわうじてシャルルちゃんは一命を取り留めた。

しかし、意識が回復することは無かつた。

意識が回復するのは、奇跡でも起きぬ限り無理だといわれた。

負ったダメージが酷すぎたのだ。

彼は、ずっと彼女の側に居る。

最悪の結果になった。

あの時言った、彼の依存。

傍田には、普通の恋人同士にしか見えないが彼らに違和感があった。

何かは分からなかつたが、忠告はした。

だが、それも無駄に終わつた。

ただただ、生きているだけの死人と貸した彼の瞳には光が無い。

何も無かつた。

「…………あなたは、もう、戻えないのかしら？」

私は、そっと目を閉じ、意識を闇に沈めた。

シャルが寝っている病室で、俺は絶望していた。

医者からつづられた言葉は、弱つきっていた俺の心を折るには十分だった。

ただ、寝ているだけに見える彼女が、もう起きないなんて信じられない。

あの太陽のような笑顔が、もう見れないなんて。

彼女の手料理もまだ食べていない。

出でへるのまえばかり。

「…………」「こんなことな」

「こんなことなるのな」

「…………出会わなければよかった

俺のそばにいたから、彼女はこうなった。

それなら、出会わなければ良かつた。

1年前のあの日、寝て無視すれば良かつた。

彼女の告白を受け入れなければ良かつた。

「…………なあ、しゃる……？」

彼女は答えてくれない。

どれだけ呼んでも、かえってくるのは静寂のみ。

どれだけ手を握っても、握り返してはくれない。

どれだけ涙を流しても、拭ってはくれない。

夕日に照らされた病室で、誰かの鳴き声だけが静かに響いていた。

彼が泣いている。

私の愛しい彼が悲しんでいる。

でも、体が動かない。

行って抱きしめてあげたいのに。

それでも体は動かない。

『…………』じんなことなら

ああ、彼の声。

悲しみにくれた彼の声。

『…………出会わなければよかったです』

そんなことはない。

私はあなたに逢えて感謝している。

あなたと共にいられて感謝している。

後悔なんて微塵も無い。

それなのに

それなのに、どうして

この体は動かない？

カミサマ

この気持ちを伝えたい。

彼に伝えたいのです

後悔などしていないということを。

私の愛しい彼に

出合えたことに感謝しているということを。

だから

私は、あなたを愛しているということを。

彼の元へ・・・・!

あなたと共に生きて生きたい。

私は、強く、強く願つたのです。

奇跡（前書き）

えりつか。 おやといひです。

何か最終回っぽいけど違います。
まだまだ続くと思います。

そんな感じの9話目です。

ステイティレ魔法学校に俺が入学したのは、それが普通のことだつたからだ。

『世界最強の5人』^{ファースト・オリジン}であり、しかしその中でも特に規格外の2人。あいつははずつと引き籠もつてゐるからいいのだが、俺は外見は普通の少年。

怪しまれないので学校に行くことにした。

ちなみに校長が政府に顔がきく大物で、俺の入学の際、便宜してもらつた。

そして、彼女とであつた。

最初は仕方ないからだつた。

でも、初日放課後から自分の意思で学校に通うことにしてた。

今思えば、一目惚れ、というヤツだつたんだろう。

実技で一緒にグループになつたり、一緒に下校したり、休みの日には買い物に付き合つたこともあった。

毎日が本当に楽しかつた。

俺が『世界最強の5人』^{ファースト・オリジン}の、しかも化け物だといふのに関わらず俺

を受け入れてくれた少女。

俺の人生に色をつけてくれた少女。

あの日、この少女を守らうと決めた。

何があつても必ず守ると。

それなのに、どうして?

俺は、守れなかつた。

前の俺なら相手が動いた瞬間に取り押さえることができたはずだ。

頼りきつていた。

あの子が側にいるだけで、浮ついてしまう。

彼女のいつとおりにだけ動く。

それで守れるはずが無い。

それはまさしく、彼女への依存が招いた悲劇。

俺は弱い。

なにが世界最強だ。

何が狂戦士だ。

目の前の1人すら守れないただのバカだ。

どこから間違ったのだろう。

いや、出会わなければ良かつたのか。

目を開ければ放課後の教室だった。

俺以外には誰もいない。

1人、いた。

灰色の景色の中で唯一つ、色のついた人。

肩までの金髪に、澄み切った青色の瞳。

小柄の体とは対照的に育つ所は育つている。

彼女は帰る用意をしていた。

俺はただ座っている。

彼女が席を立つ。

それでも俺は座っている。

ここに声をかければ、巻き込んでしまう。

出会わなければ良かつた。

声をかけるな。

かけてはいけない。

「…………どうして、泣いているんですか？」

泣いている？

ああ、そうだ俺は泣いている。

何故？

そんな事は分からきつていい。

「君が行ってしまうから・・・」

ぽつぽつと机に黒い染みができるしていく。

「それでいいはずなのに、出会わなければ良かつたはずなのに、駄目なんだ」

静かに独白していく。

「出合わなければ君は怪我を負つ」ともなかつた。君は幸せになれた。それでも、それでも俺は

「

拳を握り締める。

言葉に。

この想ひを言葉に。

「俺は、君と一緒に居たい」

「君と共に歩んでいきたい」

「自分の意思で……！」

そつと握り締めた拳に温かみが伝わった。

彼女の手が包み込んでいた。

「……やつと、言つてくれましたね」

「……ああ、随分と時間がかかった

「それでも、言つてくれました」

「君は、後悔しないかい？」

「するわけ無いじゃですか。だって、愛していますから」

「ありがとう。俺も愛してる」

「せい」

「一緒に生きよつ。一人で支えあつて」

「はい！」

とびきりの笑顔。

手を取り合う。

その瞬間、世界に色が着いた。

そして温かさも。

笑いあう。

「一緒に」

「未来へ」

世界がはじけていく。

恐怖は無かつた。

手のぬくもりが残っているから。

田を覚ました。

バウセーリシャルのこる廊室で歸ってしまったから。

「・・・夢、か」

やつを見たものばかりだったよつだ。

「・・・は、都合の良すぎる夢だな」

「やつですか？」

「え・・・ー?」

振り返ると、そこには彼女がいた。

優しく微笑んでいる彼女が。

もう聞くことがないと想っていた彼女の声。

もつ見る」ことが無いと思っていた彼女の笑顔。

自然と涙がこぼれる。

「もう、泣き虫ですね。ヴァン君は」

「ああ、格好悪いかな?」

「そんな事は無いですよ。もっとヴァン君を知りたいです」

「俺も、シャルのこと、もっともっと知りたい」

「はい、ゆっくり時間をかけて知つていきましょう。時間はこいつにありますから」

「ああ、ずっと傍で支えてくれるかい?」

「あたりまえです。私のことも支えてくださいね?」

「わかつてゐよ。支えあって生きていこう」

「はー」

「愛してゐる」

「愛してこまか」

抱きしめあー、唇を重ねる。

長く長く重ねあつて、そして笑いあつた。

ただただ、純粋に。

ただただ、幸せに。

創立謝祭 part1（前書き）

随分と遅れながら100000PV達成～！

本当にありがとうございます。

これからも頑張って面白い小説を書けるよう尽力いたします。
どうか、見守つてやってください。

今回から少しほのぼのとします。
ノリで演劇にしてしまったけど大丈夫か?
いまさら不安になつてきました。
そんな感じの十話目です。

創立謝祭 part1

ある洋館の一室。

赤い外套を手に持っている青年は、一枚の調査用紙を見ていた。

「ハッ、こんなところにいやがつたのか」

誰もが息を呑むほど端整な顔立ちをした青年は、やれやれと首を振った。

「アイツの存在はトップシークレットだし、下手に会いに行けねーな・・・どうしよう」

青年はしばし考え、ある答えにたどりついた。

「1ヶ月後の創立謝祭に、ゲストとして御呼ばれしようかな?」

我ながらナイスアイデアだと自画自賛しているところに使用人が声をかけてきた。

そして一枚の写真が渡される。

「これっぽ•••」

先程とは一転し田を細めかわしい顔をする青年。

[写真に写っていたのは一つは山で、一つは荒れ果てた荒野だった。]

同じ場所から撮ったものなのだ。

たつた3時間。

それだけで山を荒野に変えられるのはあいつだけ。

だが、あいつがやつたとは考えられない。

アイツは超がつくほどどのめんどくさがりやだからな。

普段なら、だが。

「暴走したのか？」

つまりは、そういうことである。

青年はなんだ笑みを浮かべた。

「クハツ・・・さつきの案はやめだ。乗り込むぜ」

使用者は一応連絡を入れておきます、と部屋を出て行つた。

「しかし、おまえが暴走してヨーイで済むとは・・・弱くなつたのか、それとも・・・」

後者であればいいと思つ。

「クハツ・・・どうやらせよ行けばわかるか」

先程の使用者が帰つてきて、一つのトランクケースを渡す。

「いつてくるぜ。たぶん2週間ほどだと想ひ。ようじへ

「はい。良い旅を、イグニ・ロヒヤルド様」

そういう、恭しく頭を下げる使用人にひらひらと手を振り、『紅星
クロス・ブロメテウス』を背負う物は炎となって消えた。

さて、2カ月後は創立謝祭とつことでクラスの出し物を決めている。

当然俺は昼寝だ。

だが、いつまでも起きなければならない。

やれ、メイド喫茶だとか

やれ、歴史研究だとか（あまりにも地味すぎだ）

お化け屋敷だとか、魔法ショー、賭けレース、etc・・・

「あの・・・」

机を上げる手をいたずらと手を上げる少女がいた。

「はい、シャルです。」

「演劇がやりたいです」

「演劇ねえ・・・」

「いいんじゃない?」

「あ、いいじゃん」

誰かのそんな言葉を皮切れに呟がいいかもとか、やってみたいなど
か、言い出した。

「それでは、演劇でいいですか?」

とのクラス長の言葉に全員一致でうなづく。

とこりわけで、演劇に決まったよつだ。

「で、やつてひつた?」

あれから一週間。

どうにか台本が出来上がったのだが、問題は配役。

ちなみに内容は「うだ。
ストーリー」

人間と魔物が戦いを繰り広げていた。

やられればやり返し、血で血を洗う。

そんな中、人間の姫はいつ終わるとも知れない戦いを悲しんでいた。

共存の道はないのかと、来る日も来る日も文献をあさり、実地に赴き、何か無いかと考えていた。

そんな時、いつものように実地に赴いた姫を魔物が襲つた。

何もなさぬまま死んでしまうのかと、死にきれないと悔やんだそのとき、次々と魔物が倒れていった。

そこにいたのは、人にあって人にあらず、魔であって魔にあらず、自らを魔人と呼ぶ少年だった。

彼こそが共存の突破口だと信じ姫は行動を開始する。

そして魔物をそそのかし国取りを行おうとしていた悪臣を倒し、魔物との共存を果たす姫。

しかし、悪臣の部下が姫を殺そうとする。

それを防ぐため姫をかばう魔人。

魔人は最後に、己の思いを伝え死んでしまう。

姫は、魔人の最後の言葉を胸に生きていく。

という感じ。

ハッピーホンドじゃないのか？

何か曖昧だな。

まあいい。

そして配役。

姫・シャル。 無難だな。

魔人・俺。

意味わかんねーし。

「あなたにピッタリなのよ

知らないよ、そんなこと。

「それに一応最後にキスシーンを入れていいのよ。あなた以外の適役がないわ。それともなに？他のヤツとキスさせてもいいの？」

「いいわけあるか」

「なら、いいわね？」

「ぐ・・・わかつたよ」

意外と黒いなクラス長。

名前忘れたが。

「アニーよ」

「心を読むな」

「顔に出てる」

まったく、今度から『気をつけよ』。

そういうえば前のバカとの一戦で、学校中に俺とシャルの関係は知れ渡つている。

前のように落ちこぼれとも思われなくなったり、何か話しかけてくる人が増えた。

今ではクラスに打ち解けている。

人生なにが起きるかわかんねえ。

「良かつたですね、ヴァン君」

「めんべくせいがな・・・」

「ふふつ、たまには動いてください」

「ほいよ。がんばりましょうかね」

平和な日常がこれほど楽しいなんて知らなかつたな。

「主役一人。はやくきて〜」

「いま、こきまーす」

それじゃあ、全力で楽しめますか。

現在を、な^{いま}。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441x/>

私と彼の恋物語

2011年11月20日04時03分発行